

26 年 8 月 9 日 説教「小さな事に忠実な人」

ルカの福音書 19 章 11～27 節

ルカの福音書 19 章の冒頭はお馴染みのザアカイの出来事の記事でした。今朝は一見は全く関わりのないテーマとなります。

1. 遠い国に旅立った人 (11～14 節)

- ①たとえ話の理由 (11)「人々がこれらのことに耳を傾けているとき、イエスは、**続けて一つのたとえを話された。それは、イエスがエルサレムに近づいておられ、そのため人々は神の国がすぐにでも現れるように思っていたからである。**」

人々がザアカイの出来事とイエスの教えに集中させられているとき、主はさらにたとえ話をされます。エルサレムが近づいているにも関わらず、人々のうちには神の国は目の前で、それを楽観して迎える雰囲気を取り巻いているからでもありました。

- ②身分の高い人の旅立ち (12～13)「それで、**イエスはこう言われた。「ある身分の高い人が、遠い国に行った。王位を受けて帰るためであった。彼は自分のしもべを呼んで、十ミナを与え、彼らに言った。『私が帰るまで、これで商売しなさい。』**

イエスのたとえ話です。ある身分の高い人とは、遠い国に行って王位を受けに行くほどの立場の人でした。出かける前に、彼が企てたことは、しもべ達にお金を預けることでした。彼らに総額十ミナを用意して言ったのです。「帰るまでにそれを用いて商売をしなさい」と。一ミナというのは労務者百日分の労賃です。

- ③彼が王になることを否定 (14)「**しかし、その国民たちは、彼を憎んでいたので、あとから使いをやり、『この人に、私たちの王にはなってもらいたくありません』と言った。**」

ところが、その身分が高い人は国民に不人気で、憎んでいる人々も少なからずいたのです。そこで、国民たちはその人に王位を授ける権威者に、彼には王になってもらいたくない。ひいては、それを授けないでもらいたくない旨を使い託して伝えたのでした。

2. 一ミナをあずけられた中の三人 (15～21 節)

- ①帰って来た人と十ミナ儲けた人 (15～17)「さて、**彼が王位を受けて帰って来たとき、金を与えておいたしもべたちがどんな商売をしたかを知ろうと思い、彼らと呼び出すように言いつけた。さて、最初の者が現れて言った。『ご主人さま。あなたの一ミナで、十ミナをもうけました。』主人は彼に言った。『よくやった。良いしもべだ。あなたはほんの小さな事にも忠実であったから、十の町を支配する者になりなさい。』**

ところが、そんな批判は全く届いていなかったかのように、彼は王位を受けて帰ってきたのです。そして、金を与えておいたしもべ達に、商売の結果を尋ねたのです。第一番目の人は言いました。一ミナで十ミナ儲けました。すると主人は、「良いしもべよ、あなたは小さな事に忠実だったので、十の

町を支配させる」と伝えました。

- ②五ミナ儲けた人（18～19）「二番目の者が来て言った。『ご主人さま。あなたの一ミナで、五ミナをもうけました。』主人はこの者に言った。『あなたも五つの町を治めなさい。』」

二番目の者は一ミナで五ミナ儲けたことで、主人から、五つの町を治めることを命ぜられました。

- ③一ミナをしまっておいた人（20～21）「もうひとりが来て言った。『ご主人さま。さあ、ここにあなたの一ミナがございます。私はふるしきに包んでしまっておきました。あなたは計算の細かい、厳しい方ですから、おそろしゅうございました。あなたはお預けにならなかったものをも取り立て、お蒔きにならなかったものをも刈り取る方ですから。』」

もう一人は、一ミナを風呂敷にしまっておいたというのです。理由は主人がお金のことには厳密で恐ろしく、預けられなかった部分までについて問われ、刈り取られるのではと思ったからだというのです。

3. 持っている者はさらに（22～27 節）

- ①悪いしもべ（22～23）「主人はそのしもべに言った。『悪いしもべだ。私はあなたのことばによって、あなたをさばこう。あなたは、私が預けなかったものを取り立て、蒔かなかったものを刈り取るきびしい人間だと知っていた、というのか。だったら、なぜ私の金を銀行に預けておかなかったのか。そうすれば私が帰って来たときに、それを利息といっしょに受け取れたはずだ。』」

主人はその人に対し、「悪いしもべ」と言い、その人自身が言った言葉をもってさばいたのです。すなわち、主人が取り立て、刈り取りについて厳しいと知っていたというならその通りにしようというのです。主人は、彼が銀行に預けるという知恵を使えば、その利息を得られたのにとがめました。

- ②一ミナの取り上げ（24～25）「そして、そばに立っていた者たちに言った。『その一ミナを彼から取り上げて、十ミナを持っている人にやりなさい。』すると彼らは、『ご主人さま。その人は十ミナを持っています。』と言った。」

その上で、彼は預けた一ミナを取り上げ、十ミナを儲けた人に渡したのです。そうすると、周りの者たちは、あの人は既に十ミナ得て、十の町も与えられているから、十分過ぎるのではと問いました。

- ③さらに与えられ人と裁かれる人（26～27）「彼は言った。『あなたがたに言うが、だれでも持っている者は、さらに与えられ、持たない者からは、持っている物まで取り上げられるのです。ただ、私が王になるのを望まなかったこの敵どもは、みなここに連れて来て、私の目の前で殺してしまえ。』」

すると主人は公平性とは異なる事が述べます。つまり、持っている人はさらに受け、持たない者は少しの所有物まで取り上げられると言うのです。それに加えて、その人は自分が王位を受けに行った時に、それを阻止しようとした人については、厳しく裁くことを命じたのでした。

《結論》 今朝の聖書箇所はたとえ話としてはわかりやすいのです。ただ、マタイ 25 章にあるタラントのたとえ話と同じようには理解できません。マタイの方は、旅に出ていくのはただの主人です。また、しもべたちに預けた額もマタイの方はタラントという大きな単位です。僕たちに預けた額も預けられた人によって異なります。話の内容は似ているのですが、その話の目的からいっても、時期は近くても別の状況で話されたものだと思います。

そこでルカのたとえ話ですが、その人物は身分が高く、王位を受けるための旅だというのです。これは当時の時代背景を題材としています。ヘロデ大王が死んで（BC4年）、その子アケラオが王位を継承するために、帝国のカイザルの承認を得るためにローマに行き、色々あった末に、王位を得たということがあったのです。30 年も前のことですが、人々が知っていることでした。

ルカの方に出て来るお金の単位はミナ。1 ミナは約 100 日分の労賃。1 タラントが 6 千デナリ（1 デナリはローマの通貨で 1 日分の労賃）であるのと比べれば少ない額です。ともあれ、こちらでは主人から 1 ミナずつ 10 人に預けられたのです。そして、主人が王位を得て戻って来た時に、10 ミナ及び 5 ミナを儲けた人は、忠実な者とされ、それぞれに 10 の町、5つの町を支配することを任されるのです。ところが、1 ミナをしまっておいた人は悪いしもべとして、1 ミナもとりあげられ 10 ミナを儲けた人に渡されてしまいました。このたとえ話から、まずはマタイでのたとえと同じ学びができます。17 節に「よくやった。良いしもべだ。あなたはほんの小さな事に忠実であった」とあります。ここから、私たちは任された務め、奉仕やなどが、いかなる状況であっても、どんなに目立たないものであっても、それらに心を込めて、力を抜かないで行うことが求められているのです。主の前で「あなたは厳しく、取り立てや、刈り取りをする方ですから」などと、分を越え、不信仰な弁解をするのではなく、与えられたなかで精一杯するならば、その成果が一ミナであっても良いし、場合によっては十分な成果がなくとも主は受け入れてくださると信じます。

ルカは 16 章において、管理人のたとえ話で「小さい事に忠実な人は、大きい事にも忠実である。」（10 節）という言葉、17 章では僕の在り方が語られ、仕事をした僕が「私たちは役に立たぬ僕です。なすべきことをしただけです」（10 節）という言葉を取り上げています。そして、19 章に至っても、「小さな事に忠実」であることを伝えています。ということは、十字架を目の前にしたイエスは、弟子を始めとする信者たちが、僕（奴隷）のように従う心を教えようとされていたと思われます。それは考えることを否定しているのではなく、十字架の主の前では従うことの価値が伝えられているのです。

このたとえ話は、11 節にあるように、神の国がすぐにも来ると思っている人々への主イエスの戒めでもありました。また、14 節にある「私たちの王になってもraitくたくない」とあるのは、イエス・キリストに対して人々が、十字架刑を受けたときに、「王なら、自分を救ってみよ」という声を思い出します。そして、帰ってくるという点は、再臨の主のことも示されています。十字架の主を忘れずに、いつ主が来られても良いよう、主の僕としての道を歩んでいきましょう。